

とこなめ おお かめ 常滑の大甕

近年、各地で発掘された出土遺物の中で、中世に製作された陶器が数多く出土している。それは、美的な追求のみならず、製作された時代の背景や様相を伝える重要な手掛かりになっている。この時代には信楽、瀬戸、渥美、常滑の窯で盛んに大量の焼き物を生産した。それらは最も便利な方法で全国各地へ運ばれていった。

展示している大甕は、現在の愛知県常滑市で作られ、はるばる関東へ運ばれてきた。このように大型の、しかも壊れやすい甕はどうやって作られ、運ばれ、持ち主の手に渡り、何に使われたのだろうか。消費地に残るほぼ完形のこの大甕は、その鍵を解くものとして、注目されるものである。

甕の形状

この大甕は、口縁部の一部がわずかに欠損し、胴部の下半にヒビを生じているものの極めて保存状態の良い完形品である。内面には孔やヒビを補修するためのセメントが付着し、また口縁と頸部の隙間には針金が1条めぐらされている。

大きさは、口径58.4cm、肩部最大径94.0cm、底径22.8cm、高さ74.8cmである。

器形は、いわゆる甕形をしており、見た目は胴部が半球状に丸みを持っている。底部から胴部へは内湾気味に丸みを持ちながら立ち上がり、胴上部から肩部にかけて最大径をとる。肩部から頸部へは内側へ屈曲し、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁外側に幅約5cmの縁帯部を有している。口縁の断面形は、頸部との隙間がほとんどなく密着した状態である。口縁上部にわずかな窪みがみられ、いわゆる「N字状口縁」と呼ばれる形状を呈している。

成形は、粘土紐巻き上げによるもので、はじめに底部の円盤を作り底部から肩部までを一旦作り上げた後、肩部より上部の成形を行っている。胴部外側には斜め方向のナデが施され、口縁部は丁寧なヨコナデがなされている。内面には、粘土紐の巻き上げに沿って指頭痕等の圧跡が観察できる。また、外面の胴部上部と肩部には、第1図に拓影を揚げた押印が2条めぐらされている。



▲常滑の大甕（品川区立品川歴史館所蔵）

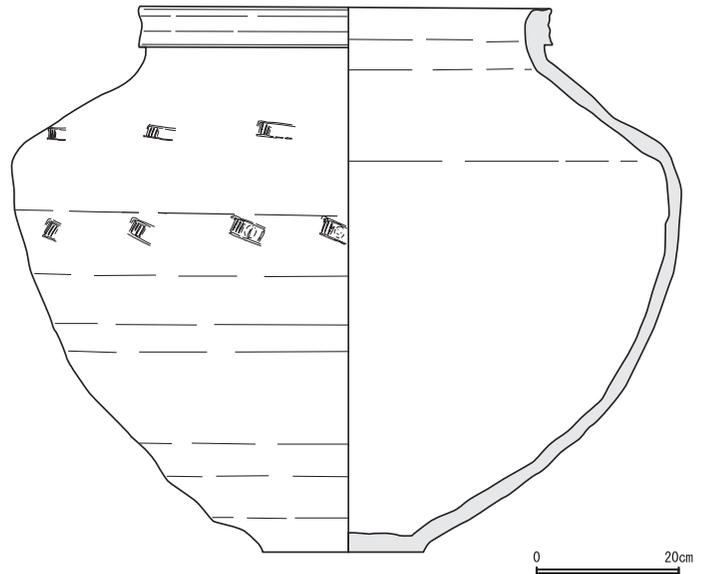
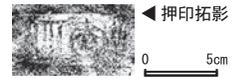
甕の入手経路

この甕のように大型で重く、しかも壊れやすい物が、どうして品川のこの地にあったのだろうか。

昭和55年（1980）、通称御殿山と呼ばれる北品川のさる土地で開発計画があり、遺跡の可能性について地主と協議中、邸内に放置されていたこの大甕を譲り受けた。御殿山の西縁に位置するこの土地に、所有者は戦前から住んでいたということで、それはすでにこの場所にあったということである。

近年の研究で、各地の発掘調査の出土遺物から、中世には想像以上に流通経済が発達していて、日本各地を結ぶ陸路・海路の通運により頻繁な物資の交流があったことが明らかになっている。関東にも太平洋海運によって西国の物資が多

量に運び込まれてきた。品川は江戸内湾の奥部に位置する主要な港で、関東という大消費地の入り口であった。実際に多摩川流域には中世常滑窯産の大甕が出土しており、港町として発展していた品川との関連が注目されている。この大甕も商品として売買され、伊勢湾内の港から積みだされ、太平洋海運により関東をはじめ各地へと運ばれていったと考えられている。



▲第1図 常滑大甕実測図

法量 □ 径58.4cm 底 径22.8cm
最大径94.0cm 器 高74.8cm

甕は何に使われたか？

常滑窯で製作された器種の代表的なものには、壺、甕があげられる。集落遺跡や城館跡からは貯蔵容器として用いられた出土例が多いが、^{きょうづか}経塚容器や埋葬容器（土葬・火葬）、あるいは蓄銭容器としても使用されている。この甕に近い形として東京都府中市宮町出土の例が2件あるが、甕の破片に骨粉の付着が認められたことから甕棺であったと報告されている。

甕はいつつくられたか？

大甕の製作年代は、赤羽一郎氏の示された常滑窯の変遷（1984）に照らし合わせ15世紀の所産と捉えられるが、最近各地での出土例から中野晴久氏の編年考察も加え、15世紀前半にさかのぼるのではないかと推測されている。

御殿山という歴史的な地からは、幕末の品川台場築造の折に、多量の^{いたび}板碑・^{こりんとう}五輪塔・人骨などが出土した。御殿山眼下の目黒川河口は海上交通の要として栄えた品川湊であったとされている。これらの遺物群は品川湊を中心に生活する人々と深い関わりがあるものであったのだろう。